

# 受賞者一覧

## 一般部門

### 【最優秀賞】（1編）

自閉症・情緒学級、通級指導教室の地域交流  
～自立活動における小中連携の進路選択学習～

新浜小学校 教諭 比留間 千夏  
南行徳中学校 教諭 野口 由紀子

想像力の乏しい通級の小学生にとって中学生生活はわからないことが多く、卒業後の進路に悩み不安を抱く子が多い。そこで通級終了後の今を教えてもらうため、中学生とのオンライン交流を試みた。中学生は過去の自分と向き合い、今ここで生活をしていることを伝える意味を確認し、生きる力を蓄えることができた。本稿は、その実践を双方向からまとめたものである。

### 【優秀賞】（3編）

母語でなくても児童が自信をもって言語活動を行うことを目指して  
～スピーキング技能育成への取り組みと、生きたやり取りを実現するための工夫～

富貴島小学校 英語専科 西村 敦子

『話す』技能の獲得に有効なルーティン活動としての「強拍を意識した、ジェスチャーを使ったリズム指導」と、その活動を継続することによって獲得した技能を、児童が主体的に運用しようとするために「目的・場面・状況設定の工夫」を取り込んだ授業づくりを行っている。主体的な運用を経験することで、児童が自然と「確かな技能」や「使うことへの自信」を育むことができるだろうという仮説のもと、系統的な指導を実践している。

特別活動で培う「学びに向かう力」の育成

～友だちと一緒に伸びる喜びを得ながら・・・自分大好き！～

大和田小学校 教諭 竹内 奏恵

本学級は、自己肯定感が低く、自分に自信がない児童が多かった。学力・体力において必要な資質・能力を育むためにも、自己肯定感を高める必要があった。そこで、特別活動を重点に置き、肯定的な言葉がけをし、安心した集団の中で、互いの認め合いや学び合いを経験すれば、自分自身を肯定し自ら学ぶ力も高まっていくと考えた。本実践は、1年間を通し日々指導しながら、取り組んできたものである。

今伝えたい！自立活動の視点

～担任を支える特別支援教育コーディネーターと理学療法士～

須和田の丘支援学校 教諭 川畑 聡美  
理学療法士 櫻井 健弘

須和田の丘支援学校の特別支援教育コーディネーターと理学療法士は、校内支援や地域支援を通して自立活動の指導が生活や学習の成長を支える土台であると考え、全てのニーズのある子どもたちに効果的に指導・支援を行える環境を提供している。この論文で紹介した支援の視点や方法が、幼稚園や保育園、小学校、中学校、高等学校での指導の一助となれば幸いである。

## 【優良賞】（3編）

不祥事根絶に向かう意識の醸成

～「見られている緊張感・見守られている安心感」をキーワードに～

市川小学校 教頭 石原 朝子

不祥事根絶に向け「見られている緊張感・見守られている安心感」を柱に取り組んだ。一つは自己診断シートを活用し、教職員の意識と規範意識の向上を図ること。もう一つは教頭が「駆け込み寺」のような存在となり、教職員に信頼と相談の場を提供し、安心感を育てること。これにより密室化を防ぎ不祥事の未然防止に寄与した。課題は一部職員の指導についての認識の違いである。不祥事根絶に向けては管理職が強い意識で継続的に取り組むことが必要であると考えた。

ミドル教員をサポートする校内体制に関する一考察

～ミドルミーティングの活用を通して～

市川小学校 教諭 熊谷 和修

本研究は、ミドル教員の校内サポート体制について方向性を示すことを目的とし、課題の共有と焦点化、役割の明確化を行い、校内ミドル教員チームの設置と「ミドルミーティング」という研修及びコミュニケーションの場を設定することを通して検証したものである。「ミドルミーティング」後のリフレクションを基に検証した結果、時間の確保やファシリテーターの必要性などの課題があったが、同僚性の向上やミドル教員の意識の変容という成果も見られた。

児童生徒の人権意識を高める指導法の工夫

～「主体的・対話的で深い学び」につながる学習形態の工夫を通して～

第四中学校 教諭 佐藤 雅秀

本校の学校教育目標である、「多様性を認め合える居心地の良い環境作り」を達成するため、人権教育を柱とした一年間の取り組みの報告である。お互いが多様性を認め合い、他人を許容しあう心を育成することで、学校における様々な生徒指導上のトラブルを減らし居心地の良い環境が作れるだけでなく、将来の社会において人権意識高揚の中心となる人物の育成が図れると考えた。これは様々な手法を絡め、本校全職員で取り組んだ記録である。

## 【特別賞】（1編）

夢の実現に向けて行動する子供の育成を目指して

～コロナ禍における「夢の実現に向けて行動する子供の育成」に向けた取り組み～

市川小学校 校長 小籠 宏

令和2年2月、新型コロナウイルス感染症の拡大が始まった。それから今日まで、その影響は続いている。そうした中、「感染を拡大させない」「学びを止めない」ことに気をつけながら、手探りで教育活動を模索し続けてきた。本論文は、市川小学校に校長として着任した令和4年4月からの学校経営についてまとめたものである。

## フレッシュ部門(経験5年以下部門)

### 【優良賞】(2編)

わかる・できる体育学習

～主体的・対話的で深い学びを通して～

大洲小学校 教諭 原田 敦俊

学習指導要領が改訂され、体育科の目標に「生涯スポーツ」の視点が追加された。これは、体育科で運動をするだけでなく、大人になってからも何らかの形でスポーツに関わる人材の育成を目指すものであると考えた。授業改善を行い、児童から「わかった!」「できた!」が聞こえる学習を行うことで、「運動をすることが苦手でもスポーツはおもしろい」と思える体育学習を目指して実践を行った。

「行きたい!使いたい!」学校図書館

～児童の読書意欲の向上を目指して～

大洲小学校 教諭 田浪 侃歩

ICTの活用が急速に進み、児童の周りには様々な情報があふれている。電子書籍や動画視聴などが児童の娯楽の1つとなりつつある今、「本を読む」ということの楽しさや素晴らしさをどのように伝えていけばよいか考えた。児童の読書意欲を向上させるには、日常的に本に親しむ時間を作ることや児童主体で活動することが大切だと考えた。本論文は、3年間図書主任として行った活動を3つの観点でまとめた実践記録である。

\*学校名は、令和5年度在籍校です。

市川市教育委員会 学校教育部 教育センター